2022年　2月　1日 会報 133 号 内容　歴史探訪案内	# かわち野に吹く風	東大阪文化財を学ぶ会 会長　南　光 弘

歴史探訪　　在原業平も歩いた龍田道を行く～法隆寺、藤ノ木古墳、龍田神社～

開催日　2月17日（木）　雨天決行

※コロナ感染状況により実施、延期を判断します。ホームページ「歴史と街かど」をご覧ください

１．集合時間　　午前９時３０分（時間厳守）受付９時１５分～

２．集合場所　　ＪＲ法隆寺駅　改札口付近

３．費　　用　　1540 円（法隆寺 1300 円　入館料、斑鳩文化財センター240 円）

４．持 ち 物　　マスクは必ず着用ください

５．行　　程　　（全行程約８㎞、坂道あり）

ＪＲ法隆寺駅→法隆寺・南大門→中宮寺跡→東院伽藍・夢殿→西院伽藍・五重塔→（昼食）→西里の町並み→藤ノ木古墳、斑鳩文化財センター→（在原業平姿見の井戸）→（龍田道・業平道）→龍田神社→龍田公園→龍田川→近鉄竜田川駅　解散予定３時３０分　※初時雨醸造元　太田酒造に寄り道

≪地名「斑鳩」の由来≫

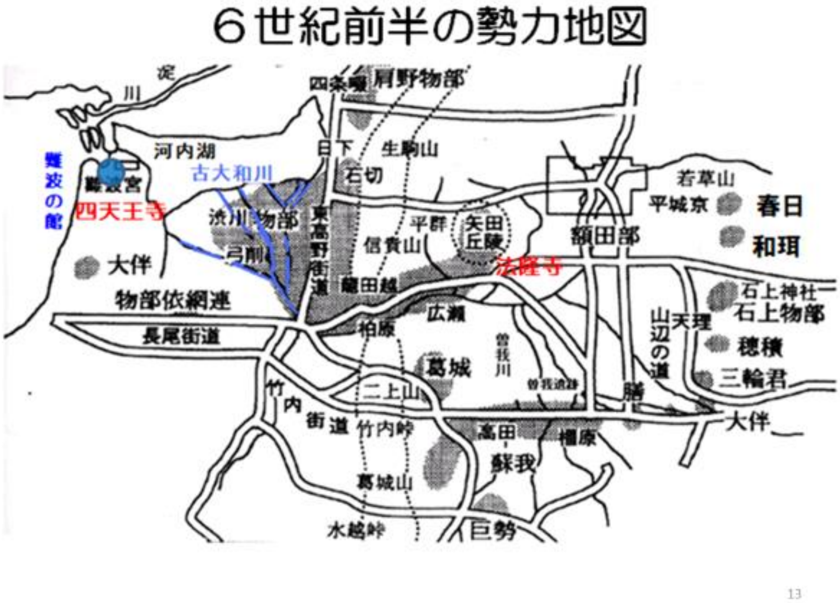
一説には、この地に「イカル」（アトリ科イカル属）というおおきさは椋鳥位の鳥が群れをなしていた為だと言われている。「斑鳩」「鵤」と書く。

逆に「イカルガ」というの地で多く見受けられたからという説もある。また、鳴き声が「イカルコキー」と聞こえるからとも言われる。

しかし、饒速日尊の末裔、物部氏に多い名前の「伊香（イカ）」に由来するとも考えられる。例えば、伊香津臣命は、伊香刀美の５世孫で余呉湖の天女羽衣伝説に登場する物部氏の末裔。そして、伊香色謎命（崇神天皇の母）や伊香色雄（いかがしこお）が存在している。肩野物部の祖、伊香色男の邸宅は、枚方の「伊加賀」。近くに意賀美神社があり、石切劔箭神社所蔵の三角縁獣帯四神四獣鏡と同じ文様、銘文の同笵鏡が出土している万年寺山古墳がある。また、生野区に「巽伊賀ヶ町」は、物部守屋の旧領。さらに、饒速日尊降臨の地「哮峯」（いかるがみね）の「イカル」から「斑鳩」の地名の由来は物部守屋の所領であったところ、と考えられる。

≪龍田道≫≪業平道≫

龍田道は、万葉の時代、龍田山周辺部は大和と河内をつなぐ街道の要所であり、人・モノ・文化が往来した古道だ。また、『続日本紀』や『万葉集』に登場し、春は桜、秋はモミジ等の自然風景の景勝地として多くの歌が詠まれている。



この古道は、太古から政治や経済の物流の大動脈として利用され、幾つもの役割を持った道でもあった。大和が強力な勢力を張っていた時代、サヌカイト、花崗岩、凝灰岩等の石器や石材などの運搬、国道的な役割を担った。天皇の行幸を始め、厩戸王（聖徳太子）、官人や渡来人、外国の使者がこの古道を経て大和への出入り口になっていた。また、業平が八尾の河内姫のもとへ通ったルートの一つとも考えられている。

龍田（越）古道は、生駒・金剛山脈を越える道の中で最も比高差が少ない大阪（難波）と奈良（大和）を結ぶ丘陵越えの奈良街道だ。

≪厩戸王≫

昨年、令和３年は厩戸王（聖徳太子）が亡くなって 1400 年目の節目の年にあたっていた。

厩戸王は、推古天皇９年（601）に斑鳩宮の造営を開始し、その４年度後に斑鳩へと移住した。斑鳩宮をはじめ、岡本宮などの諸宮を造営し、斑鳩寺（法隆寺若草伽藍）や中宮寺などの寺院を建立した。

厩戸王は、『日本書紀』には、敏達天皇３年（574）、用明天皇と穴穂部間人皇女の間に生まれたと記されている。「聖徳太子」という呼び名は、後に贈られた名前で、生前の呼び名は「厩戸王」。

崇峻天皇５年（592）、女性初の天皇である推古天皇が即位すると、厩戸王は摂政として、「冠位十二階」や「十七条憲法」を制定するなど、天皇を中心とした国づくりを進めた。推古天皇９年(601）、「斑鳩官」の造営を始め、４年後に斑鳩に移住した。そして、推古天皇 30 年（622）、厩戸王は斑鳩宮にて 49 歳で亡くなり「磯長墓」に葬（ほうむ）られた。

≪解　説≫　法隆寺の歴史

		藤の木古墳　６世紀後半築造　直径約 50m、高さ約 9m の大型円墳
601	推古　9	厩戸王（聖徳太子）、斑鳩宮の造営を始める。
605	推古 13	厩戸王、斑鳩宮に移る。
606	推古 14	斑鳩寺の名が『日本書紀』に始めて登場する。
607	推古 15	厩戸王、父の用明天皇のため薬師如来座像を造像する（同像銘による）
622	推古 30	厩戸王、49 歳で没。
623	推古 31	金堂の釈迦三尊像（鞍作止利作）が完成。（同像銘による）
643	皇極　2	蘇我入鹿が山背大兄王らを斑鳩宮に襲い、上宮王家（太子一族）滅亡
669	天智　8	斑鳩寺焼失
670	天智　9	法隆寺の伽藍が一屋も余さず焼失と『日本書紀』に記される
771	和銅　4	五重塔の塑像と中門の金剛力士立像が完成。西院伽藍がほぼ完成か
739	天平 11	行信僧都が斑鳩宮跡に夢殿を中心とする上宮王院（東院）を造立
747	天平 19	「法隆寺伽藍縁起并びに流記資材帳」を作製
1934	昭和 14	若草伽藍跡より、創建当時の塔と金堂など四天王寺式の遺構が焼土とともに発掘される
		年輪年代法で五重塔の心柱（ヒノキ）の伐採が 594 年ごろと判明
2001	平成 13	後に、670 年前後に伐採した他の部材が見つかる。地鎮具の和同開珎が発掘される。（奈良文化財研究所）

①　中宮寺跡

現在の中宮寺は、法隆寺東伽藍夢殿の東隣にあるが、創建時の中宮寺は室町時代後期頃までは、現在の本堂から約 500m東の地にあった。開基は厩戸王（聖徳太子）で、母穴穂部間人皇后（あなほべのはしひと）のためにその宮を改めて寺とした伝えられ、厩戸王建立七ケ寺に数えられている。なお異説として、開基は穴穂部間人皇后自身であるとの伝承もある。

その創建時期は、昭和 38 年から実施された発掘調査によって法隆寺の前身寺である若草伽藍と同時期の７世紀前半ごろと推定され、四天王寺式伽藍であったと明らかになっている。

これまでの発掘調査の結果、塔と金堂が南北に並ぶ「四天王寺式伽藍配置」であることが判明している。特に塔跡については、地下深くに据えられた塔心礎の上面から、金環やガラス玉、水晶製角柱などが出土し、心柱を心礎上面に立てるための「足場」の柱穴が日本で初めて確認されている。出土した軒瓦で最も古いのは、花弁(かべん)が均等に八分割された「奥山廃寺式」と呼ばれる素弁八弁蓮華文軒丸瓦で、620 年頃の瓦と考えられている。

②　斑鳩宮

『日本書紀』によれば、厩戸王は推古天皇９年（601）に斑鳩宮の造営に着手し、４年後の推古天皇 13 年（605）には、斑鳩宮に住んでいると記されている。厩戸王の没後は子の山背大兄王が受け継いだが、皇極天皇２年(643)に蘇我人鹿の襲撃を受けて斑鳩宮は焼失した。その後、天平 11 年（739）に僧行信によって、斑鳩宮跡に夢殿を中心とした法隆寺東院・上宮王院が造営された。

約80年ぶりに見つかった斑鳩宮の壁土の破片（12日、奈良県斑鳩町の斑鳩文化財センターで）

昭和９年（1934）に始まった東院の解体修理工事にともなう発

掘調査において、斑鳩宮と考えられる三つの時期の掘立柱建物などの宮殿遺構・東院地下遺構が見つかった。それ以降の発掘調査によって斑鳩宮の東と南の範囲を示す溝が見つかるなどの成果があり、少しずつ斑鳩宮の様相が明らかになっている。

③　法隆寺若草伽藍跡

法隆寺は斑鳩寺ともいわれ、創建については、推古天皇と厩戸王が、推古天皇 15 年（607）に建立したことが薬師如来像の光背銘に記されている。「若草」という名称は、江戸時代の延享３年（1746）の『古今一陽集)』に記されており、その場所は西院伽藍の南東の実相院や普門院の裏手に広がる空閑地で、大きな礎石・塔心礎が据えられている。昭和 14 年の若草伽藍跡の発掘調査により、現在の法隆寺（西院伽藍）は、『日本書紀』の天智天皇９年(670)年の法隆寺火災の後に再建されたもので、若草伽藍が厩戸王の建立した法隆寺と考えられている。若草伽藍は、北に対して**西に 18 度**振れた塔と金堂が南北に並ぶ「四天王寺式伽藍配置」で、その後の発掘調査により、伽藍中心部を囲む塀が見つかっている。また、平成の若草伽藍跡の西方で行った発掘調査では、焼失を裏付ける焼けた瓦などとともに焼けた壁画が出土し、小片のため図柄はわからないが、日本最古の寺院壁画として貴重なもの。

④　法隆寺

現在に伝える世界最古の木造建築として広く知られている。創建は、「金堂」に安置されている「薬師如来像」の光背銘や『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（747）の縁起文によって知ることができる。それによると、用明天皇が自らのご病気の平癒を祈って寺と仏像を造ることを誓願されたが、その実現をみないままに崩御された。そこで推古天皇と厩戸王が用明天皇のご遺願を継いで、推古１５年（607）に寺とその本尊「薬師如来」を造られたのがこの法隆寺（斑鳩寺）であると伝えている。現在、法隆寺は塔・金堂を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられている。広さ約１８万７千㎡の境内には、飛鳥時代をはじめとする各時代の粋を集めた建築物が軒をつらね、たくさんの宝物類が伝来している。国宝・重要文化財に指定されたものだけでも約 190 件、点数にして 2300 余点に及んでいる。法隆寺は厩戸王が建立された寺院として、1400 年に及ぶ輝かしい伝統を今に誇り、1993 年には、ユネスコの世界文化遺産に日本で初めて登録されるなど、世界的な仏教文化の宝庫として人々の注目を集めている。（法隆寺発行　略縁起による）

≪南大門≫鯛石・法隆寺の七不思議の一つ

法隆寺の南方を東西に流れる大和川。大雨により大和川が氾濫した時も、不思議にこの鯛石の所までしか水が上がって来なかったと言う。いつしか南大門前の鯛石を踏むと、水難に遭わないという伝説が広まった。

≪金堂≫

法隆寺のご本尊を安置している。四方に階段を付けた二重の基檀に立つ二層づくりであるこの金堂は、柱上に横材が何段も井桁に組まれているもので、飛鳥時代の特徴的な建造物。また、金銅釈迦三尊像をはじめ、諸像が安置されているほか、天井には、天人と鳳凰が飛び交う天蓋が吊るされ、周囲の壁面には、世界的に有名な飛天図が描かれている。世界的にも知られていた１２面の壁画は、昭和の大修理の最中の昭和２４年（1949）1 月 26 日朝、火災につつまれ、焼失してしまった。現在は昭和 42 年に 14 名の日本画家の手によって再現された壁画が白壁を埋めている。

また、現在入母屋造りの屋根をしている金堂は、昭和の大修理時に当時の学者達は、玉虫厨子と同じと主張し錣葺き（しころぶき ）にしようという話があったが、これに反対したのが「法隆寺の鬼」西岡常一棟梁。後に、慶長の大修理時の資料などから入母屋造りだったことが判明している。

≪五重塔≫

高さ約 31.5m（基檀上より）で、我が国最古の五重塔として知られ２重基檀の上に建ち、各重の平面と屋根の大きさは逓減率が大きく、また、５重目の柱間は初重の半分になっている為、非常に均整のとれた、安定した美しい印象を与えている。五重塔は釈尊の遺骨（仏舎利）を泰安するための塔だが、塔の原形はインドのストゥーパーで、日本に伝わる途中、中国で楼閣の形になった。また、最下層内陣には、奈良時代初期に造られた塑像群があり、地下 1.5mに埋められた大理石の上部には舎利奉納孔があるが、本当に仏舎利があったのかは謎であるといわれている。同様に、相輪に掛かっている鎌は法隆寺の七不思議の一つとして様々な説があり謎とされている。この五重塔心柱（ヒノキ材）の伐採が 594 年であることが年輪年代測定法により判明している。

≪ 大講堂・国宝、平安時代≫

大講堂の両脇には、経蔵と鐘楼があるがこれは古代寺院の様式で、大講堂に並んで経蔵・鐘楼が並存するのは法隆寺だけ。また垂木勾配を緩くしたままにする為、日本独特の屋根の上に屋根を設けるという形式の屋根では現存最古もの。鐘楼とともに正暦元年（990）には再建された。

本尊の薬師三尊像及び四天王像もその時に作られている。

≪夢違観音（ゆめちがいかんのん）と大宝蔵院≫

明るい表情と美しい均整のとれた夢違観音像。この仏像に祈れば吉夢に変えてくれるという信仰があり、夢違観音とよばれている。白鳳時代の作品であり高さ８６．９ｃｍの銅造で、額には化仏をつけ、顔は丸顔で、やや鋭角的な唇に優しほほえみをうかべている。また、上半身裸形で身体は豊かな厚みがあり、天衣はゆるやかな曲線をもち、左手には小さな水瓶をもっている。現在法隆寺の大宝蔵院にあるが、江戸時代の宝永７年（1710）以降は東院絵殿の本尊として祀られていた。

≪夢殿と救世観音（ぐぜかんのん）≫

厩戸王が住まわれた斑鳩宮跡に、行信僧都という高僧が、厩戸王の遺徳を偲んで天平１１年（739）に建てた伽藍を上宮王院（東院伽藍）という。その中心となる建物が夢殿。八角円堂の中央の厨子には、厩戸王等身と伝える秘仏救世観音像（飛鳥時代）を安置し、その周囲には聖観音菩薩像（平安時代）、乾漆の行信僧都像（奈良時代）、平安時代に夢殿の修理をされた道詮律師の塑像（平安時代）なども安置している。この夢殿は中門を改造した礼堂（鎌倉時代）と廻廊に囲まれ、まさに観音の化身と伝える厩戸王を供養するための殿堂として、神秘的な雰囲気を漂わせている。国宝観音菩薩立像（救世観音）は八角円堂で知られる夢殿のご本尊で秘仏として長い間人目に触れず過ごしてきた仏像。

飛鳥時代に造られた樟の木の一木造りで、像１７８．８ｃｍ、下地は漆を塗り、白土地に金箔を押している。保存もよく、いまなお金色燦然と、当初の漆箔が輝いている。独特の体躯の造形を有し（体躯がやや扁平で、Ｓ字状のポーズ）、杏仁形（アーモンド形）の目や古式な微笑みをたたえる表情は神秘的で、手にはすべての願いがかなうという宝珠を持っている。

天平宝字５年（761）の記録に「上宮王等身観世音菩薩像」とあり、厩戸王（厩戸王）の等身像ともいわれて秘仏であったが、明治１７年アメリカ人の学者フェノロサと近代美術の先駆者、岡倉天心によって像を幾重にも覆っていた長い白布が除かれ広く世に知られるようになった。当時、この秘仏の白布をとることは、厩戸王の怒りに触れ、大地震が起こると言われ、天心とフェノロサが布をとるとき、法隆寺の僧たちは恐れをなして、逃げていったという。

斑鳩の里の風景

左の図　『あしたず』23 号
「藤ノ木古墳の秘密」清水守民著より転載

古墳時代　藤ノ木古墳一伏蔵一鯛石

飛鳥時代　斑鳩宮一若草伽藍一焼失法隆寺一中宮寺跡

律令時代　現法隆寺一夢殿

＜再建された法隆寺の謎５つ＞

1）　五重塔の心柱の伐採年代が 594 年と判明。西院伽藍の完成は和銅年間と言えるが、五重塔はどこからか移

築されたのか。
2) 若草伽藍が再建されたが、なぜ四天王寺式の伽藍配置でないのか。
また伽藍配置の方向が違うのはどうしてか。
3) エンタシス様式の柱、雲型斗栱（ときょう）や皿斗（さらと）「人」の字の形をした束などは550年ごろから600年頃までの間、中国で使われいた建築意匠という。
4) 670 年の法隆寺伽藍焼失時に本尊の釈迦三尊像はどこで祀られていたのか。
5) 薬師如来座像は西院伽藍完成時に造像されたと考えられるが本当に、光背文通り釈迦三尊像より時代を遡るのか。

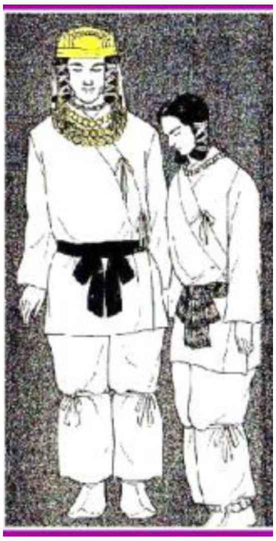
≪参考≫ 法隆寺の七不思議
その１．法隆寺の伽藍には蜘蛛が巣を作らず、雀も糞をかけない。
その２．南大門の前（階段の下）に鯛石と呼ばれる大きな石がある（前述）
その３．五重塔の上部の九輪に鎌が四本刺さっている（前述）
その４．法隆寺に財宝の隠し場所といわれている経蔵伏蔵、金堂伏蔵、大湯屋伏蔵がある
その５．西院伽藍と東院伽藍を結ぶ石畳の大路の奥にある因可池（よるかのいけ）の蛙には片目がない
その６．夢殿の救世観音像の前の礼盤（お坊さんが座る台）の裏が汗をかいている
その７．雨だれの穴が地面にあかない

⑤ 藤ノ木古墳

藤ノ木古墳は法隆寺の西方約300mにある円墳である。直径は現状で39～43mで、築造当初は径48m、高さ9m程度であったと考えられている。

石室は南東に開口する横穴式石室で、玄室奥には朱を塗られた家形石棺が安置されている。石棺は二上山白色凝灰岩を用いた到抜式家形石棺で、蓋長辺傾斜面には二対の縄掛突起がつく。棺身は長さ約２．３m、幅は東側で1.3m、西側で1.17m（数値はいずれも上部）、高さは東側が高く96.9ｃm、西側が低く79.8ｃmである。

玄室入口横には多量の土器が置かれ、玄室奥壁と石棺との間からは金銅馬具や挂甲札などが一括して出土した。馬具には鞍金具・心葉形鏡板付轡・壷鐙・障泥縁金具・歩揺付辻金具・棘葉形杏葉があり、いずれも透彫など精緻な装飾が施されており、当時の金工技術の粋を結集して作られたものであるといえる。



石棺内は埋葬当初の状態のまま残っており、棺内の豊富な遺物の内容もさることながら、その配置状態が確認できる点はきわめて貴重である。主な棺内遺物としては金銅製冠・筒形銅製品・金銅製履・銅製大帯・銀製垂飾金具・空玉・ガラス玉・鏡四面・大刀五本・剣一本・経錦などが確認されている。

豪華な副葬品。果たして被葬者は誰か。穴穂部皇子や崇峻天皇が候補。斑鳩寺が創建される以前の「斑鳩」の地に藤ノ木古墳が築かれていた。また、斑鳩の東には穴穂部間人皇女の菩提寺と言われる中宮寺、更に物部氏の宝物庫・石上神宮がある。ここは守屋が後ろ盾した小姉君、物部氏の本拠地といえる。

・物部系の墳墓　<u>崇峻天皇の倉梯岡上陵　円墳３５m</u>
・蘇我系の墳墓　用明天皇陵、東西６５m、南北６０m
　　推古天皇陵　東西５９m、南北５５m（三段築成）
　　磯長墓（厩戸王）東西５３m、南北４３m（厩戸皇子、穴穂部間人皇女（用明天皇皇后）、膳部菩岐々美郎女３人の合葬墓・三骨一廟）
　※いずれも方墳。蘇我氏、「石舞台」をはじめ全て方墳。

⑥ 龍田神社

伝承によれば、厩戸王（厩戸王）が法隆寺の建設地を探し求めていたときに、白髪の老人に化身した龍田大明神に逢い、「斑鳩の里こそが仏法興隆の地である。私はその守護神となろう」と言われたので、その地に法隆寺を建立し、<u>鎮守社として龍田大明神を祀る神社</u>を創建したという。元々の社名は「龍田比古龍田比女神社」で、その名の通り龍田比古神・龍田比女神の二神（龍田大明神）を祀っていた。延喜式神名帳にもこの名前で記載さ

れ、小社に列している。
しかし、後に龍田大社より天御柱命・国御柱命の二神を勧請したため、元々の祭神は忘れられた。現在は天御柱命・国御柱命を主祭神とし、龍田比古神・龍田比女神を配祀している。
鳥居が、ちょっと変わっているのが面白い。当社の神使は鶏。手水鉢に鶏の像が置かれている。
因みに、立田山、御座ヶ峰に創基した風神で著名な龍田大社は、『延喜式』祝詞の「龍田風神祭祝詞」によれば、崇神天皇の時代、数年に渡って凶作が続き疫病が流行したため、天皇自ら天神地祇を祀って祈願し、夢に天御柱命・国御柱命の二柱の神を龍田山に祀れというお告げがあった、これにより創建されたとある。
『日本書紀』には、天武紀４（675）年４月１０日条に小紫美濃王・小錦下佐伯連広足を遣わして、製鉄に欠かせない風を祀る風神を龍田の立野に祀らせ、龍田大社風神祭を国家の祭祀とする記事がみえる。
近代社格制度のもと、明治４（1871）年に龍田神社として官幣大社に列し、現在は、農業・航空機・船舶・航海・漁業等、風に関係する者の信仰が篤い。
「風神」とは、天地間の大気・生気・気・風力を司る神のこと。天武の時代の「風神」⇒風鎮（風を鎮める）
境内摂社に、龍田比古命、龍田比売命が祀られている。

⑦　龍田川

竜田川は、生駒山東麓の生駒市、田原口付近を上流として斑鳩町で大和川に合流する 15Kｍほどの短い川。
竜田川は、古代より全域を「平群川」と呼ばれていたが、片桐勝元が竜田城を築き、竜田城下町を定め、また、法隆寺の神宮寺であった宮を龍田神社と名付けて以来（慶長年間 1600 年頃,江戸期以降)在地の人々は、近くを流れる「平群川」を「竜田川」と呼ぶようになった様だ。そして、それ以来「平群川」は、それぞれの流域ごとに「生駒川」、「平群川」、「竜田川」と呼ぶようになったと考えられている。
明治 22 年「町村制の施行」後、明治 30 年に平群郡を生駒郡に郡名を変更した。「平群郡」の終焉を迎えた。
郡名が変更されても川の名前は「平群川」と呼ぶ流域もあり呼び名を統一ことになり、1966 年（昭和 41）全流路が「竜田川」となった。
では、在原業平（825～880）が詠んだという「龍田川」は、どこを流れていた川なのか?
◎千早振る　神代もきかす　龍田川　唐紅（からくれない）に　水くくるとは　　　古今和歌集巻５－294
不思議なことが数多く起こったという神々の時代でも聞いたことがない。龍田川に、鮮やかな紅色のモミジが散り流れ、水をくくり染め（＝絞り染め）にしているとは。
◎あらし吹く　三室の山のもみぢばは　竜田の川の　錦なりけり　　　　　　能因法師
≪龍田」を詠まれた歌から読み解く「龍田川」≫
万葉の時代「もみぢ」は「黄葉」であり、「もみち」と発音した。万葉集で紅葉の「もみぢ」は一首しかない。和歌に詠まれた古（いにしえ）の龍田川は、現在の平群町を流れる川・竜田川ではないことが解る。龍田山を源流として三室山をめぐり龍田大社の近くの磐瀬の森に流れ下っている川、関屋川が「龍田川」と呼ばれていたと考えられる。なお、在原業平のこの歌は、「屏風歌」といわれるもので、屏風に描かれた様に合わせた歌を詠んだもの。龍田川を目の当たりにしては詠まれていない。　　　　　以上　文責　南　光弘

≪古代史講座≫日程変更しています。
・第８回講座 2022 年２月 26 日（土）　（１月の予定でした）
　テーマ　『七支刀』と日本の鉄器文化
　講　師　並松 晃（文化財を学ぶ会）
　＊会場は社会教育センター３Ｆ視聴覚室　開始時刻は 13 時 20 分。16 時までの予定
・第９回講座 2022 年３月 26 日（土）　（２月の予定でした）
　テーマ　コロナ時代から見る、疫病蔓延下（『崇神紀』）の陶村～誤った認識改めて～
　講　師　品川 清（吉備古代史研究家）
　＊会場は社会教育センター２Ｆ集会室　　開始時刻は 13 時 20 分。16 時までの予定
≪歴史探訪≫
・３月 15 日（火）の歴史探訪は、①枚方樟葉方面②湖北、バスの旅。①②どちらかとご案内していましたが、今後のコロナウィルス感染状況が不透明。終息する気配がない。よって、バスツアーは、現時点では、４月以降に延期の方向で考えています。詳しい日程は決定次第お知らせ致します。